

## 第109回定期演奏会

## PROGRAM

## オール・ベートーヴェン・プログラム

Ludwig van Beethoven

## 序曲「コリオラン」ハ短調 op.62 (約8分)

Coriolan Overture in C minor, op.62

## 交響曲 第3番 変ホ長調 op.55 「英雄」 (約45分)

Symphony No.3 in E flat major, op.55, "Eroica"

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ *Allegro con brio*第2楽章 葬送行進曲:アダージョ・アッサイ *Marcia funebre: Adagio assai*第3楽章 スケルツォ:アレグロ・ヴィヴァーチェ *Scherzo: Allegro vivace*第4楽章 フィナーレ:アレグロ・モルト・ポコ・アンダンテ・プレスト  
*Finale: Allegro molto - Poco andante - Presto*— 休憩 (20分) — *Intermission*

## ピアノ協奏曲 第5番 変ホ長調 op.73 「皇帝」 (約40分) ★

Piano concerto No.5 in E flat major, op.73, "Emperor"

第1楽章 アレグロ *Allegro*第2楽章 アダージョ・ウン・ポコ・モート *Adagio un poco moto*第3楽章 ロンド:アレグロ・マ・ノン・トロツポ *Rondo: Allegro ma non troppo*指揮:クラウディオ・クルス *Claudio Cruz, Conductor*ピアノ:ブルーノ=レオナルド・ゲルバー *Bruno Leonardo Gelber, Piano* (★演奏曲)管弦楽:兵庫芸術文化センター管弦楽団 *Hyogo Performing Arts Center Orchestra*2018 10/19(金)・20(土)・21(日) 3:00PM開演  
兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール

主催:兵庫県、兵庫県立芸術文化センター

※演奏時間は目安となります。前後する可能性がありますので予めご了承ください。

助成: 文化庁文化芸術振興費補助金  
(舞台芸術創造活動活性化事業)  
文化庁 独立行政法人 日本芸術文化振興会これさえ  
見れば  
わかる!

## 今回の聴きどころ

東条 碩夫(音楽評論家)

## 大ベートーヴェンの不滅の名作を3曲

文豪ロマン・ロランが「傑作の森」と呼んだ、ベートーヴェンの創作力が驚異的な高揚を示していた30歳代の時期。今日演奏されるのは、その時期に生れた充実作である。

序曲「コリオラン」は、彼の11曲ある序曲のうちで最も密度の濃い作品。また「英雄交響曲」は、交響曲史上における画期的な金字塔であり、ベートーヴェンも「自作の交響曲の中で一番好きなのはこの曲」と語ったほどの力作だ。そして「皇帝」は、そのニックネームにふさわしい、壮大なスケールを誇る大曲である。

楽典に興味のある方は、今回のプログラムが、ハ短調(「コリオラン」と「英雄」と「皇帝」)の作品で構成されていることにも注目されたい。ともにフラットが3つ(譜例参照)ある。このような調性は、「平行調」とも呼ばれ、近親性がある。例えば今回、基本調性がハ短調である「コリオラン」では、第2主題が変ホ長調で登場するのである。



ハ短調、変ホ長調の調号

## 必聴POINT

ライター  
おすすめ!!

ベートーヴェン:序曲「コリオラン」ハ短調 op.62

## 《主人公は古代ローマの悲劇の将軍》

「コリオラン」の性格が、なんと見事に音楽に反映していることだろうか(注1)と評された曲。剛直な主題と、内省的な主題との対比のうちに、悲劇的に展開、終結する音楽が聴きもの。

ベートーヴェン:交響曲 第3番 変ホ長調 op.55 「英雄」

## 《交響曲の歴史を塗り替えた大作》

小さなモチーフを縦横無尽に展開させ、緊密に構成して長大な楽章をつくるのはベートーヴェンの得意わざ。それが初めて本格的に発揮されたのがこの「英雄交響曲」だ。

ベートーヴェン:ピアノ協奏曲 第5番 変ホ長調 op.73 「皇帝」

## 《古今のピアノ協奏曲における王者》

「皇帝」という副題は、ベートーヴェンでなく、後世のだれかが付けたもの。だがその語のイメージは、この曲の並外れたスケールの大きさ、堂々たる風格と威容にふさわしい。

# PROGRAM NOTE

曲目解説 —  
演奏をより深く楽しむために  
東条 碩夫(音楽評論家)



## ベートーヴェン:序曲「コリオラン」ハ短調 op.62

初演:1807年3月 ウィーン

### 創作力の絶頂期に生まれた緊迫感に富む序曲

コリオランは、古代ローマの将軍コリオレイナス、本名ガイウス・マルキウス・コリオラヌスを指す。彼はローマを守った英雄ながら、傲岸な性格が災いして祖国を追われる。のちに敵国の将軍となってローマに侵攻するが、ローマに残した母や妻の嘆願により兵を退く。だがこれがもとで彼は、その敵国から裏切り者の烙印を押されて殺害されるのだった——。

ハインリヒ・ヨーゼフ・フォン・コリンによるこの戯曲「コリオラン」を観たベートーヴェンは、演奏会用序曲として、1807年春にこれを作曲した。交響曲「運命」「田園」など多くの傑作を次々に生み出していた時期の作品にふさわしく、強い緊迫感と揺るぎのない構築力にあふれる曲である。初演後にも続いて何度か演奏され、当時の「一般音楽時評」という新聞では「力と情熱にあふれている」と報道された。

冒頭から大きな休止を挟んで何度も叩きつけられる動機と、続いて現われる焦立つような表情を持つ第1主題とは、コリオランの尊大で強靱な意志を象徴し、なだらかな第2主題(変ホ長調)は母と妻を思いやる彼の憂いに満ちた性格を表わす、と解釈してもいいであろう。これらがソナタ形式で展開され、クライマックスを築いたあと、曲は主人公の運命を象徴して、暗く消えるように終結する。——どんな場合でも力強い終り方をするのが常だったベートーヴェンの作品の中で、このように悲劇的に終る曲は、非常に稀な存在である。

#### 楽器編成

フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、  
弦楽5部

## ベートーヴェン:交響曲 第3番 変ホ長調 op.55 「英雄」

初演:非公開 1804年12月 公開1805年4月7日 いずれもウィーン

### 交響曲に「理想主義」の概念が加わった

聴覚障害による失意(1802年の「ハイリゲンシュタットの遺書」)から立ち直ったベートーヴェンは、1803年(33歳)から、以前にも増して猛然たる作曲活動を開始した。これ以降の数年間がいわゆる「傑作の森」の時期であり、そこで生み出された大傑作の数々は枚挙に暇がない。

その最初の大作の一つが、ここに聴く「英雄交響曲」である。それまでの交響曲(彼自身のものを含む)と桁外れに違う点は、スケールの大きさ、長大さ、緊密な構築性といった特徴だけでなく、理想主義的な人生観——人生における闘争、勝利、肯定への英雄的な意志力——といったものが作品に籠められているということであろう。その意味からも彼が、貧しい境遇から身を起して革命児となったナポレオン・ボナパルトに共感を抱き、この曲を捧げたいという考えを抱いたとしても、あながち不自然とは言えまい。

第1楽章は、変ホ長調の和音をいきなり強烈に2回叩きつけて始まる。曲冒頭にまず主調の和音で一撃を加え、それから「本論」に入るのは、彼の得意わざだ。そのあと、短い主題のモチーフがいかに緻密に、しかも明晰に組み合わせられ、巧妙に展開されて行くかは、じっくりと聴いていれば理解が行くだろう。驚異的な作曲技法だ。

第2楽章に「葬送行進曲」を置いたのも奇抜な発想だ。これも展開に次ぐ展開、単なる葬送行進曲のイメージを超えた堂々たる巨大な挽歌である。

第3楽章は、以前の作曲家が用いた「メヌエット」の替わりにベートーヴェンが導入した「スケルツォ」(諧謔曲)だが、その力強い推進力は、これも空前のものであった。

そして第4楽章は、長大な変奏曲である。最初の方に弦楽器群がピッツィカート(はじく)で出すモチーフと、やがてオーボエなど木管群が吹きはじめる軽快な主題(注2)。この両者が同時に組み合わせられ、上下一体となって限りなく展開されて行くその妙味を堪能されたい。

さて、ナポレオンは、1803年12月2日に戴冠式を行い、ついに皇帝となった。これを聞いたベートーヴェンは激怒した。革命の英雄にして自由の精神を象徴するはずだった男が、なんと反動的な権力保持者と化したのである。「あの男もただの野心家だったか。いずれは暴君となり、民衆を踏みじめるだろう」——そう叫んでベートーヴェンは、総譜の表題頁に書いてあった「ボナパルト」の文字を抹殺し、単に「シンフォニア・エロイカ(英雄交響曲)」という表題に変えたのであった。

## 楽器編成

フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン3、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部

## ベートーヴェン:ピアノ協奏曲 第5番 変ホ長調 op.73 「皇帝」

初演:非公開 1811年1月13日 ウィーン 公開 同年11月28日 ライプツィヒ

## ベートーヴェン最後の、かつ最大のピアノ協奏曲

かつてはベートーヴェンの精神を鼓舞する存在であったそのナポレオンが、1809年にはついにウィーンへ攻め込んで来る。歴史の皮肉というべきか。

包囲されたウィーンは、12日午後には早くも白旗を掲げ、13日にはナポレオン皇帝がシェンブルン宮殿に宿泊するという事態になる。市外では未だ戦闘が続いていたが、7月上旬のヴァーグラム会戦で奥軍13万は仏軍17万と戦い、2万の戦死者と1万5千の捕虜を出して敗北。オーストリアは、10月14日に屈辱的な講和を結ばざるを得なかった。市内を闊歩するフランス軍人を見たベートーヴェンが、「おれが(作曲の)対位法と同じくらい軍の

戦術を心得ていたら、奴らに目にももの見せてくれるのに」と口惜しがったという有名なエピソードが伝わっている。ただその一方、ナポレオン個人に対しては、なお一抹の畏敬の念を捨てきれなかったという話もある(注3)。

そのような時代に作曲されたのが、この「ピアノ協奏曲第5番」なのだった。1808年の暮からスケッチが始められ、1809年の夏か秋までに全曲が書き上げられた。「傑作の森」の時期を締め括る大作である。

曲は、オーケストラがまず変ホ長調の主和音を叩きつけ、独奏ピアノが豪壮に分散和音の演奏で応えるという前例のない手法で開始される。続く第1主題、第2主題、いずれもスケールが大きい。ベートーヴェンでなければ書けない音楽だ。

ダイナミックな響きのうちに第1楽章が終ると、第2楽章は一転して叙情的なアダージョになる。その主題がもつ深みと気品に満ちた美しいカンタービレも、ベートーヴェンが得意としたものだ。第2楽章の最後に、ピアノがゆっくりと第3楽章の主題を予告し、堰を切ったようにその闊達なフィナーレに突入する。そこでのソロ・ピアノとオーケストラの応酬は、まさに豪壮雄大である。

なお「皇帝」という副題は、ベートーヴェン自身が付けたものではなく、この曲の壮大な風格に因んで、のちに出版社が命名したものである。もちろん、ナポレオン皇帝とはまったく無関係なものにすぎない。

## 楽器編成

独奏ピアノ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部

(注1、注3) セイヤー著「ベートーヴェンの生涯」大築邦雄訳(音楽之友社刊)

(注2) この主題は「プロメテウスの創造物」のバレエ音楽(1801年)、「創作主題による変奏曲とフーガ」(1802年)、「12のコントルダンス」(同)にも使われた、ベートーヴェンのお気に入りのものである。



## 作曲家プロフィール

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827)

Ludwig van Beethoven

ボンに生れ、ウィーンで生涯を送った不世出の巨匠。「クロイツェル・ソナタ」を完成した1803年頃から中期の作風に入り、「英雄」の他、「運命」「田園」「ヴァイオリン協奏曲」「熱情ソナタ」を含む数多くの傑作を生み出す。1812年の交響曲「7番」と「8番」のあと後期の時代に入り、創作もやや下火になるが、1820年代に入ると盛り返し、「第9」や「ミサ・ソレムニス」、最後の弦楽四重奏曲集などを書き、永遠の高みに達して行くのだった。